

声なき声を形に

■バス停での光景

にかほ市のコミュニティバスは、お客さんが使いやすいように自由乗降できるようになっています。路線内ならば、手を挙げればどこでもバスに乗ることができ、降るときも運転手さんに降りたい場所を伝えればどこでも降ろしてもらえます。

象潟にあるスーパーの横にコミュニティバスの停留所があります。お昼前になると多くの買い物客が主にお年寄りの皆さんが、その停留所でバスが来るのを待っています。

2年前の話になります。ある日、バスを待っている彼らお年寄りの人たちを見て何か気がなりました。私自身、いつも車でその横を通り過ぎていきましたが、その日に限って何か収まりの悪さを感じました。いわゆる違和感です。

すぐにその違和感の正体に気付きました。それはバスを待っているお年寄りの人たちが縁石や地べたに座ってバスを待っている姿でした。

「イスがない。ベンチがない。買い物客を済ませたお年寄りが荷物とお尻を地べたに下ろしている。なんて不親切で、思いやりのないバス停になってしまったんだ」とそのとき気付いたのです。

バスを待っている彼らお年寄りの皆さんにすれば、それが当たり前になってい

たのかもしれない。お尻が痛くても、服が汚れても文句を言わずに、それを我慢していたのだと思います。ずっとです。

■課題を作り出す

最近、かつてある人から言われた言葉を思い出します。それは「人々の課題を作り出すのも政治の役割である」というものです。若い頃に言われたその言葉が、当時はすんなり受け入れられませんでした。「それってやらせ?」、「独善的になるんじゃない?」といった生意気な疑問が多分先走っていたのだと思います。

ですが、いまはその意味が素直に「すうっ」と心の奥に染み入って来ます。その言葉は私が常に言い続けている「人の声に耳を傾ける」、「声なき声を形にする」と同じだということに気付いたからです。

■声なき声に耳を傾ける

前述のバス停の話に戻ります。私がここで伝えたいのは、その停留所でバスを待つ皆さんは、普通に日常を暮らしている人々の典型なのだということです。

大部分の人は、自分の思いや欲求を大きな声で主張することなどほとんどなく、むしろ忍耐強く日々を平穩に暮らしているものです。だからこそ、私たち政治に携わる者は、彼らの声、声にならない声に耳を傾けなければ、普通に暮らす

人々の想いを見過してしまうことになるのだと私は思うのです。その意味からも、今回のこのエピソードは、ちよつとしたことへの気付き、それが大事なんだということを改めて私に気付かせてくれるものでした。

■最後に

最後に、この話のその後について紹介します。

市はすぐに1個ではありませんがベンチを設置しました。できればもっと多く置きたかったし、屋根も付けたいところでしたが、場所の問題などいろいろな制約もあって、今は1個だけとなりました。ですが、この1個のベンチは私にとって1個以上のとても大きな意味のあるものとなりました。

ちなみに、このベンチはその意図をご理解いただいた地域の郵便局長会の皆さんからご提供いただきました。このコラムを借りて改めて感謝申し上げます。



にかほ市長
市川雄次

